

一般的に甲殻類と呼ばれている節足動物門甲殻綱（または甲殻上綱）に属する生物種は非常に多岐にわたっており、分類群や種も多く、島根県内における甲殻類の全体像については未解明の部分が多い。その中でも十脚目といわれるエビ・カニ・ヤドカリの仲間については、近年の情報が蓄積されつつある分類群である。このような現状の中で、今回のしまねレッドデータブック掲載種の改訂にあたっては、前回2014動物編に掲載された十脚目と等脚目の2つの分類群に限定して検討を行った。

## 十脚目について

島根県における十脚目については、近年、県東部を中心に潮間帯や沿岸域、汽水域およびその周辺陸上域、淡水域に生息する種類について、分布や生息確認などの報告がある。エビ類については、河川や湖沼に生息する淡水性・汽水性の小型エビ類の情報が主である。県内の分布や生息状況については、淡水エビ類の研究者でもある元島根大学教授の故上田常一博士（1903～1981年）の報告や標本があり、1940～1960年代の記録が残されている。その後しばらくは正確な記録がほとんどない状況であったが、2008年頃から県東部を中心に調査が進み、近年の分布と生息状況が少しずつ解明されている。カニ類およびヤドカリ類については、2010年代から汽水域や沿岸域で県内初記録の種も増えるなど、新たな知見が蓄積され、基礎的資料も整理されている。

これら十脚目のうち、前回の掲載種と新たに報告された淡水・汽水性のエビ・カニ類を選定した。ヤドカリ類については、中海などの汽水域に生息する種もいるが、海産種が中心なため対象外とした。カテゴリーの評価にあたっては、生息状況が地域によって情報の偏りがあるため、県内全域において可能な限り現地調査や聞き取り調査を実施し、現状を把握することに努めた。

ハマガニは、新産地が県西部で確認されたものの生息数はわずかである。また、県東部の一部や隠岐諸島での既産地においては、近年の生息情報が途絶えており、絶滅のおそれが高い状況にあるため、絶滅危惧Ⅰ類から変更はしなかった。ミナミヌマエビは、近年の遺伝子分析調査により類似種である外来のシナヌマエビが県内全域に広く定着しており、本種の生息地は限られていることが明らかとなった。また、県内には4系統が確認されており、過去の分布域外でも確認されていることから、他地域からの集団も移入していた可能性がある。このため、外来系統の侵入による生息場所の競合や交雑による遺伝子攪乱のリスクが大きくなっていることから、前回の準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類へランクを上げることとした。ヒラテテナガエビ、ヤマトヌマエビ、ヒメヌマエビは、県内全域で新産地が確認されるなど生息情報が増えてはいるが、河川改修や堰堤の建設などによる生息条件の悪化が懸念されるため、準絶滅危惧から変更はしなかった。また、ベンケイガニ、マメコブシガニは、近年の生息情報が少ないものの前回と生息状況は変化がないため、準絶滅危惧から変更はしなかった。フタバカクガニは、県東部と隠岐諸島で確認されているが、評価にいたる新たな生息情報が得られなかったため、情報不足から変更はしなかった。

今回、新たに選定した種は3種で、キタノスジエビとカワスナガニを絶滅危惧Ⅱ類、アリアケモドキを準絶滅危惧とした。キタ

ノスジエビは、2019年に新種記載された種で県内にも生息することが明らかとなった。現在のところ本種の生息地は県東部の一河川のみで生息数も減少傾向である。カワスナガニは、2013年に日本海側地域において初めて確認された全国的に希少なカニ類で、県内の生息地は少ない上に生息範囲が狭く生息数も不安定な状況である。アリアケモドキは、2014年に県内で初めて確認された汽水性のカニ類で、県内での生息地は県東部に限られている。

前回掲載されたミナミテナガエビ、トゲナシヌマエビ、タイワンヒライソモドキの3種は、県内での生息情報が増えており生息数も安定していることから、リスト外とした。特にミナミテナガエビは県内全域の日本海側の流入河川で優占種となっている。近年、これら3種と準絶滅危惧に選定したヒラテテナガエビ、ヤマトヌマエビ、ヒメヌマエビは、日本海側地域での分布が北上傾向で、水温上昇による影響も示唆されているため、今後も県内での動向に注視したい。

汽水域から淡水域に生息する身近な甲殻類については、人間の生活に密着していることも多く、その生息環境は人間活動の影響を強く受けやすい。現在は、洪水対策など防災面での河川改修も増えており、生息環境の改変に対する配慮も重要である。また、シナヌマエビやチュウゴクノスジエビといった外来種の定着も確認されており、地域固有の種を守るためには在来種の正確な生息情報が必要不可欠である。県内での情報は蓄積されつつあるが、県中西部や隠岐諸島では未だ不十分な地域がある。よって、今後も県内全域での普及啓発と継続した情報収集を行い、保護を要する種については専門家の指導にそった適切な対策をとることが必要である。

（辻井要介・桑原友春）

## 等脚目について

等脚目はダンゴムシやワラジムシといった身近な陸生種のほか、フナムシやミズムシ、コツムシなど水生（海棲を含む）・半水生種を含む。今回の改定では、掲載種がすべて情報不足となった。いずれも2014動物編の掲載種である。等脚目の島根県全体の状況を把握できる情報が少ないが、陸生等脚目については唐沢・川野（2014）によって整理されている。これによると、2014動物編に掲載されたニホンハマワラジムシとニッポンヒロワラジムシについては、近似する別種と混同した記録に基づいて判定されていたことが判明した。そのため、今回、改めて判定を行った。ニシカワハヤシワラジムシ、シロコシビロダンゴムシについては追加の情報が無い状況である。水生種については、シンジコスノウミナナフシがムロミスノウミナナフシと同種である可能性が指摘されている（堀越、2012）ものの、分類学的な処置はなされていない。陸生・水生いずれの種も環境の変化によって絶滅の危機に瀕している種も存在するはずであるが、調査研究の不足によって評価が難しい状況が続いている。

（林 成多）

## 文献

## 【十脚目】

- 上田常一 (1970) 日本産淡水エビ類の研究(改訂増補版). 213pp. 園山書店, 松江.
- 桑原友春・寺岡誠二・中畑勝見 (2021) 島根県東部におけるルリヨシノボリおよびヤマトヌマエビの生息確認調査. 2020年度ホシザキグリーン財団環境修復プロジェクト報告書: 33-41.
- 桑原友春・山口勝秀・中野浩史 (2013) 隠岐諸島におけるカニ類の分布調査. ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (8): 97-107.
- 桑原友春 (2014) 島根県沿岸に生息するカニ類. ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (13): 43-59.
- 桑原友春・林 成多 (2014) 島根県におけるカワスナガニの記録. ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (13): 1-5.
- 桑原友春・林 成多 (2015) 島根県の益田市でカワスナガニを確認. ホシザキグリーン財団研究報告, (18): 60.
- 桑原友春 (2019) 島根県東部におけるハマガニの記録. ホシザキグリーン財団研究報告, (22): 158.
- 桑原友春・辻井要介 (2020) 島根県におけるアリアケモドキの初記録. ホシザキグリーン財団研究報告, (23): 79-82.
- 林 成多・佐々木興・中野浩史・寺岡誠二・山口勝秀・越川敏樹 (2008) 出雲市平田地域の河川に生息する水生生物. ホシザキグリーン財団研究報告, (11): 1-60.
- 林 成多・辻井要介・中野浩史・山口勝秀・越川敏樹 (2011) 島根県出雲市の河川に生息する水生生物. ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (3): 1-108.
- 林 成多 (2013) 隠岐諸島中ノ島で観察した淡水産十脚目甲殻類. ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (8): 95-96.
- 林 成多・桑原友春 (2019) 島根県におけるチュウゴクスジエビの記録. ホシザキグリーン財団研究報告, (22): 249-252.
- 林 成多・相馬理央・辻井要介・桑原友春・佐藤仁志 (2024) 島根県に生息する淡水産エビ類のDNA バーコード領域. ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (34): 63-74.
- 林 成多・相馬理央・辻井要介・桑原友春・佐藤仁志 (2026) 島根県に生息する淡水産エビ類のDNAバーコード領域II. ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (36) (印刷中).
- 岩根 響 (2022) 島根県斐伊川水系の汽水および淡水環境に生

息するテナガエビ科(甲殻綱, 十脚目)の分布状況. 島根大学大学院自然科学研究科学学位論文.

- 丸山智朗 (2016) 本州日本海側における両側回遊性コエビ類の分布について. *Cancer*, (25): 55-60.
- 丸山智朗 (2017) 越前・能登・佐渡の河川で採集されたコエビ類. *Cancer*, (26): 35-42.
- 大澤正幸 (2022) 島根県の汽水域の短尾甲殻類 日本海西岸の汽水域のカニたち. 85pp. 島根大学研究・学術情報本部エスチュアリー研究センター.
- 大澤正幸 (2022) 山陰(島根県・鳥取県)の異尾甲殻類 日本海西岸のヤドカリ類とその仲間たち. 148pp. 島根大学研究・学術情報本部エスチュアリー研究センター.
- 大畑純二 (2008) 島根の淡水エビ類(上田コレクションについて). pp.48-53. 宍道湖自然館第15回特別展「エビ・カニ大図鑑」展示解説 しまねのエビ・カニ. 島根県立宍道湖自然館ゴビウス. 65pp.
- 佐藤仁志・加藤琢矛 (1996) 上田常一動物標本コレクション目録～甲殻類～. 島根県立三瓶自然館収蔵資料目録第1号. 138pp. 島根県立三瓶自然館.
- 白石泰志・辻井要介 (2026) 隠岐諸島・知夫里島でのヤマトヌマエビの新産地. ホシザキグリーン財団研究報告, (29): (印刷中)
- 島根県 (2015) 小田川・潮川・湯里川・福光川 河川調査報告書(魚類調査).
- 島根県 (2016) 岡見川・津田川・沖田川 河川調査報告書(魚類調査).
- 辻井要介 (2014) 島根県出雲市の湧水環境に生息するトゲナヌマエビとミナミテナガエビ. ホシザキグリーン財団研究報告, (17): 332.
- 山下龍之丞・山川宇宙・碧木健人 (2022) 石川県で採集された北限記録のタイワンヒライソモドキ. *ニッチェ・ライフ*, 9: 71-74.

## 【等脚目】

- 堀越彩香 (2012) 東京湾の干潟に生息するムロミスナウミナナフシ (*Cyathura muromiensis*) の分類および生態学的研究. 28 pp. 東京大学学術機関ディポジトリ.
- 唐沢重考・川野敬介 (2014) 島根県の陸生等脚類. ホシザキグリーン財団研究報告, (17): 19-54.

<b>甲殻類掲載種一覧</b>			計17種
<b>絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)</b>			
・ハマガニ			計1種
<b>絶滅危惧Ⅱ類 (VU)</b>			
↑ミナミヌマエビ	○キタノスジエビ	○カワスナガニ	計3種
<b>準絶滅危惧 (NT)</b>			
・ヤマトヌマエビ	・ヒメヌマエビ	・ヒラテテナガエビ	計6種
・マメコブシガニ	・ベンケイガニ	○アリアケモドキ	
<b>情報不足 (DD)</b>			
・フタバカクガニ	・シンジコスナウミナナフシ	・ニシカワホラワラジムシ	計7種
・ニホンハマワラジムシ	・ニッポンヒロワラジムシ	・ニシカワハヤシワラジムシ	
・シロコシビロダンゴムシ			

**【記号説明】**

- ・：カテゴリー区分変更なしの種（13種）
- ↑：上位のカテゴリー区分への変更種（1種）
- ↓：下位のカテゴリー区分への変更種（0種）
- ：新規掲載種（3種）
- ◇：情報不足からの変更種（0種）
- ◆：情報不足への変更種（0種）

**【掲載順の準拠文献等】**

豊田幸詞・関慎太郎（2019）駒井智幸（監修）日本産淡水性・汽水性 エビ・カニ図鑑. 緑書房, 339pp, 東京.

大澤正幸（2022）島根県の汽水域の短尾甲殻類 日本海西岸の汽水域のカニたち. 島根大学研究・学術情報本部エスチュアリー研究センター.

唐沢重考・川野敬介（2014）島根県の陸生等脚類. ホシザキグリーン財団研究報告, (17): 19-54.

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

エビ目 (十脚目) モクズガニ科

# ハマガニ

*Chasmagnathus convexus* (De Haan, 1835)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-

撮影者(提供者):辻井要介



甲殻類

### 選定理由

県内での生息地域が局所的であり、近年確認できなくなった生息地もある。生息数も極めて少なく、環境の改変などによる絶滅のおそれがある。

### 概要

南方系の陸ガニ類。甲幅50mmほどに達する大型種。甲は横に丸みを帯びた四角形で、前後に湾曲する。甲の前側縁には2つの歯があり、甲面の中央には深い溝がある。甲の体色は紫色を帯びた褐色で、個体によっては鮮やかな橙色で縁取られる。はさみ脚は大きく、鮮やかな紫色で全体に毛は少なく、平滑である。歩脚は細く上縁に短毛が密生する。夜行性で、河口の汽水域上部付近のヨシ原や土手などに深い穴を掘って生息している。ゾエア幼生は海に放たれ、メガロバ期に海岸河口域に戻ってくる。宮城県(太平洋側)・青森県(日本海側)から南西諸島に分布し、国外では、台湾、韓国、中国に分布する。

### 県内での生息地域・生息環境

近年、生息が確認できているのは、県東部(松江市、出雲市)および

#### 参考文献

桑原友春(2014) 島根県沿岸に生息するガニ類。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (13): 43-59.  
桑原友春(2019) 島根県東部におけるハマガニの記録。ホシザキグリーン財団研究報告, (22): 158.  
桑原友春・山口勝秀・中野浩史(2013) 隠岐諸島におけるカニ類の分布調査。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (8): 97-107.  
豊田幸詞・関根太郎(2019) ハマガニ。駒井智幸(監修) 日本産淡水性・汽水性エビ・カニ図鑑: 270-271。緑書房, 東京。  
上田常一(1963) 山陰地方(隠岐群島を含む)及びその付近海域のカニ類について。Researches on Crustacea, (7): 20-31.

県西部(益田市)の限られた河川のみである。日本海に面した河口の汽水域上部付近にある土手に深い穴を掘って生息している。

### 存続を脅かす原因

河川改修のコンクリート護岸化による生息環境の消失。堤防や道路建設による海への移動経路の消失など。

### 特記事項

過去に記録のあった県西部(浜田市)および隠岐(島前)での生息情報は無い。隠岐(島後)は比較的近年まで目撃情報があったが、生息確認はできていない。また、まとまった生息を確認していた松江市の既産地のひとつは、護岸改修工事以降、生息を確認できなくなっている。これらの生息地は、河川改修で河口域の護岸がコンクリート化されており、生息環境が消失したと思われる。現在も生息が確認されている河川は、河口域に泥が堆積したヨシ群落があり、本種の保全には、このような生息環境を残していく必要がある。県内の生息地では、タヘイガニやタカバガニ、ダケガニなどの地方名で呼ばれている。

(執筆: 辻井 要介・桑原 友春)

## 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

エビ目 (十脚目) ヌマエビ科

# ミナミヌマエビ

*Neocaridina denticulata* (De Haan, 1844)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-

撮影者(提供者):辻井要介



絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

### 選定理由

県内の生息域には、外来の類似種であるシナヌマエビが広く侵入・定着しており、生息場所の競合や交雑により本来の在来系統が失われるおそれがある。

### 概要

淡水性の小型エビ類。体長約30mmに達する。体色は透明なものから暗褐色や暗緑色と様々あり、頭胸甲から尾部にかけて背中一本の明るい帯模様が入る個体もある。メスはオスより体が大きく、体色が濃い。湖沼、ため池、河川中下流域、農業水路と幅広い環境に生息している。一生を淡水域で生活する陸封種。大卵型で、卵の中で幼生期を過ごし、ふ化後は親と同じ姿で底生生活に入る。日本固有種で、静岡県から鹿児島にかけて分布する。

### 県内での生息地域・生息環境

県西部を中心に分布し、河川中下流域や農業水路で確認されている。流れが緩やかで、水草や川岸の植物が繁茂した環境に生息する。これま

#### 参考文献

林 成多・相馬理央・辻井要介・桑原友春・佐藤仁志(2024) 島根県に生息する淡水産エビ類のDNAバーコード領域。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (34): 63-74。  
林 成多・相馬理央・辻井要介・桑原友春・佐藤仁志(2026) 島根県に生息する淡水産エビ類のDNAバーコード領域II。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (36) (印刷中)。  
豊田幸詞・関根太郎(2019) ミナミヌマエビ。駒井智幸(監修) 日本産淡水性・汽水性エビ・カニ図鑑: 62。緑書房, 東京。  
上田常一(1970) 日本産淡水エビ類の研究(改訂増補版)。213pp。園山書店, 松江。

で県内全域に生息するカワリヌマエビ属は在来のミナミヌマエビであるのか不明であったが、近年の遺伝子分析調査による結果から、県内には4つの在来系統が確認された。隠岐諸島や県東部の斐伊川水系で確認された系統は、過去の分布では本種の生息が確認されていない地域なため、国内移入の可能性が考えられる。

### 存続を脅かす原因

外来の類似種との生息場所の競合や交雑、農業や化学物質などによる水質汚染、河川改修などによる生息条件の悪化。

### 特記事項

類似種のシナヌマエビは、釣り餌や観賞用として流通し、遺棄・放流された結果、全国各地に定着している。本種とシナヌマエビとは形態の細かな違いがあるとされるが、一般的には見た目での識別が困難である。現在でも、ミナミヌマエビとして販売されているエビ類は、シナヌマエビなどの外来の類似種の可能性があり、飼育で導入する際には野外に放流や逸出しないように注意する必要がある。

(執筆: 辻井 要介)

## 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

エビ目 (十脚目) テナガエビ科

# キタノスジエビ

*Palaemon septemtrionalis* Katogi, Chiba, Yokoyama, Hatakeyama, Shirai et Komai, 2019

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者): 辻井要介

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-



甲殻類

### 選定理由

スジエビ *P. paucidens* に近縁な新種で県内にも生息することが判明したが、生息地は県東部の河川に限られており、生息数も減少傾向である。

### 概要

淡水性の小型エビ類。体長60mmほどに達する。体色は半透明で濃褐色のはっきりとした横縞模様があり、脚の節々は黄色や橙色になる。基本的な形態的特徴はスジエビ *P. paucidens* と同じであるが、本種ははさみの長さがやや長い傾向がある。ただし、この特徴は小型個体でははっきりとしない。河川の下流域に生息し、海と川を往き来する両側回遊型の生活を送る。国内での分布は北海道から兵庫県(日本海側)・宮城県(太平洋側)とされているが、県内の生息地は日本海側の西限と考えられる。

### 県内での生息地域・生息環境

県東部の出雲市の河川のみで生息が確認されている。日本海に流入する小規模河川の下流域から河口域に分布しており、淵の深みや流れが緩やかで礫や転石が多い環境に生息する。出雲市の生息地では過去に本種と思われる個体が多

#### 参考文献

張 成年・今井 正・池田 実ほか(32共著者)(2018) スジエビ *Palaemon paucidens* の2タイプを判別するためのDNA マーカーおよび日本における2タイプの分布。日本水産学会誌, 84: 674-681。  
張 成年・柳本 卓・小西光一・市川 卓ほか(10共著者)(2019) スジエビ *Palaemon paucidens* のBタイプにおける遺伝的分化。水生動物, AA2019-11。  
岩根 響(2022) 島根県斐伊川水系の汽水および淡水環境に生息するテナガエビ科(甲殻綱, 十脚目)の分布状況。島根大学大学院自然科学研究科学位論文。  
Katogi, Y., Chiba, S., Yokoyama, K., Hatakeyama, M., Shirai and S., Komai, T. (2019) A new freshwater shrimp species of the genus *Palaemon* Weber, 1795 (Decapoda: Caridea: Palaemonidae) from northeastern Japan. *Zootaxa* 4576: 239-256。  
豊田幸詞・関根太郎(2019) スジエビ。駒井智幸(監修) 日本産淡水性・汽水性 エビ・カニ図鑑: 94-95。緑書房。東京。

く見られたが、近年は確認できる個体数が少なく、減少していることが懸念される。今後、新たな産地が見つかる可能性はあるが、日本海に流入する河川ではスジエビ類の確認例がもともと少ない状況である。

### 存続を脅かす原因

農業や化学物質などによる水質汚染、コンクリート護岸への改修、洪水などによる生息環境の悪化。類似種との生息場所の競合。

### 特記事項

スジエビには以前から遺伝的に分化した2つのタイプの存在が知られており、湖沼や河川など幅広い環境に生息するタイプはAタイプとされ、内水面での繁殖も可能である。一方、河川にのみ生息する両側回遊型のタイプはBタイプとされ、繁殖には海域とのつながりが不可欠である。2019年に新種記載されたキタノスジエビはBタイプの中のB-I系統であり、2022年に出雲市の一河川に生息する集団が本種と判明した。県東部や隠岐諸島に多く見られるスジエビはAタイプであり、いくつかの系統が存在する。また、チュウゴクスジエビといった国外外来種も県内で確認されている。これらの類似種が本種の生息地に侵入すると生息場所が競合する可能性があるため注意が必要である。

(執筆: 辻井 要介)

## 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

エビ目 (十脚目) ムツハアリアケガニ科

# カワスナガニ

*Deiratonotus japonicus* (Sakai, 1934)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者): 桑原友春

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

### 選定理由

県内の生息地は限られ生息範囲も狭い。生息数も少なく、生息条件の悪化などで個体群の維持ができないおそれがある。

### 概要

汽水性の小型カニ類。甲幅10mmほどの小型種。甲は丸みのある四角形で、表面は顆粒が散在しザラザラしている。甲の前側縁には丸みのある鈍い歯が2つある。はさみ脚は小さめであるが、オスの方が太くなる。オスの歩脚には軟毛が密生する部分がある。体色は淡褐色や灰褐色など様々で、暗色のまだら模様がある。河川の汽水域上部で、流れのある砂礫混じりの川底に生息する。日本固有種で、島根県(日本海側)・千葉県(太平洋側)から沖縄県まで分布する。日本海側の分布は、島根県と山口県のみで、島根県が日本海側の東限である。

#### 参考文献

桑原友春・林 成多(2014) 島根県におけるカワスナガニの記録。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (13): 1-5。  
桑原友春・林 成多(2015) 島根県の益田市でカワスナガニを確認。ホシザキグリーン財団研究報告, (18): 60。  
大澤正幸(2022) カワスナガニ。島根県の汽水域の短尾甲殻類 日本海西岸の汽水域のカニたち: 71-73。島根大学研究・学術情報本部エスチュアリー研究センター。  
竹本理起(2022) 山口県長門市の潮下帯上部から陸上で確認されたカニ類。豊田ホテルの里ミュージアム研究報告書, (14): 87-108。  
和田恵次(2024) 汽水域のもつ生物的特徴。河北潟湖沼研究, (26): 23-27。

### 県内での生息地域・生息環境

県西部から県東部の日本海に面する河川下流域から河口域で生息が確認されている。生息地は局所的で生息範囲は狭く、生息数も少ない。水のきれいな河川の汽水域上部で淡水の影響がある場所を好み、河床の砂礫や転石の下に潜んで生活する。

### 存続を脅かす原因

河川改修、河床の浚渫、河口堰の建設などによる生息条件の悪化。大きな洪水による河川環境の変化など。

### 特記事項

2013年に日本海側での生息が島根県で初めて確認された後、いくつかの生息地が県内で見つっている。既産地の生息状況は不安定で、生息がほとんど確認できない年もある。本種はほかの沿岸性のカニ類にくらべて、個体群間の遺伝的変異が顕著で、個々の個体群を保全する意義が大きいとされる。

(執筆: 辻井 要介・桑原 友春)

## 準絶滅危惧 (NT)

エビ目 (十脚目) ヌマエビ科

# ヤマトヌマエビ

*Caridina multidentata* Stimpson, 1860

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者 (提供者) : 辻井要介



甲殻類

### 選定理由

県内全域に分布するが、主要な生息環境が河川上流域に限られ、河川構造物や河川改修の影響を受けやすい。

### 概要

淡水性の小型エビ類。体長約57mmに達するヌマエビ科の中では大型種。額角は短い。体側に褐色や赤褐色の鎖状または点状の模様があり、尾部には青色の斑紋が見られる。遡上能力は高く、河川の最上流部まで遡上する。海と川を往き来する両側回遊型の生活で、ゾエア幼生は海で育ち、稚エビは河川を遡上しながら成長する。石川県 (日本海側)・茨城県 (太平洋側) から南西諸島・小笠原諸島、国外ではインド・太平洋に広く分布する。鑑賞用としてペットショップなどで販売されている。

#### 参考文献

石山尚樹 (2025) 2024年に石川県で採捕された淡水性コエビ類の記録。石川県立自然史資料館研究報告, (13) : 93-101.  
桑原友春・寺岡誠二・中畑勝見 (2021) 島根県東部におけるルリヨシノボリおよびヤマトヌマエビの生息確認調査。2020年度ホシザキグリーン財団環境修復プロジェクト報告書 : 33-41.  
豊田幸詞・関慎太郎 (2019) ヤマトヌマエビ。駒井智幸 (監修) 日本産淡水性・汽水性 エビ・カニ図鑑 : 51。緑書房, 東京。

### 県内での生息地域・生息環境

県内全域の日本海に面する中小規模河川で生息が確認されている。おもに水のきれいな河川上流域で、堰下の転石や垂下植物の周辺に生息する。日中は物陰に隠れる習性があるが、渓流域の樹冠が茂った薄暗い環境では岩肌に多数の個体が見られる。

### 存続を脅かす原因

農業や化学物質などによる水質汚染、コンクリート護岸への改修、ダムや堰堤の建設などによる生息条件の悪化。販売目的の乱獲。

(執筆: 辻井 要介)

## 準絶滅危惧 (NT)

エビ目 (十脚目) ヌマエビ科

# ヒメヌマエビ

*Caridina serratirostris* De Man, 1892

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者 (提供者) : 辻井要介



絶滅  
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

### 選定理由

県内全域に分布するが、同所的に生息するヌマエビ類と比べて生息数が少ない。生息範囲が限られ、環境変化の影響を受けやすい。

### 概要

淡水性の小型エビ類。体長約25mmに達する。模様は頭胸甲から尾部にかけて背中に一本の明るい帯が入るものと、横縞が交互にあるものの2タイプがある。体色は赤褐色や暗褐色など環境によって変化する。海と川を往き来する両側回遊型の生活で、ゾエア幼生は海で育ち、稚エビは河川に入り成長する。新潟県 (日本海側)・千葉県 (太平洋側) から南西諸島、小笠原諸島にかけて分布し、国外ではインド・西太平洋に広く分布する。なお、県内では過去に本種と形態が酷似するコテラヒメヌマエビ *C. celebensis* De Man, 1892が記録されており、近年の遺伝子分析調査でも県内には2系統が見出されている。しかし、厳密に同定された結果がないため、今回の改定ではヒメヌマエビとして扱った。

#### 参考文献

林 成多・相馬理央・辻井要介・桑原友春・佐藤仁志 (2026) 島根県に生息する淡水エビ類のDNAバーコード領域II。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (36) (印刷中).  
豊田幸詞・関慎太郎 (2019) ヒメヌマエビ。駒井智幸 (監修) 日本産淡水性・汽水性 エビ・カニ図鑑 : 54-55。緑書房, 東京。  
上田常一 (1970) 日本産淡水エビ類の研究(改訂増補版)。213pp。園山書店, 松江。  
山川宇宙・鎗田めぐ (2023) 新潟県佐渡島で採集された北限記録のヒメヌマエビ。ニッチェ・ライフ, 11 : 6-8。

### 県内での生息地域・生息環境

県内全域の日本海に面する中小規模河川で生息が確認されている。水のきれいな河川中下流域や河口域で、岸辺の植物の根元や落葉の堆積するような環境に生息する。

### 存続を脅かす原因

農業や化学物質などによる水質汚染、コンクリート護岸への改修、河床の浚渫、ダムや堰堤の建設などによる生息条件の悪化。

(執筆: 辻井 要介)

## 準絶滅危惧 (NT)

エビ目 (十脚目) テナガエビ科

# ヒラテテナガエビ

*Macrobrachium japonicum* (De Haan, 1849)

### カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

### 島根県固有評価

—

### 環境省カテゴリー

—

撮影者 (提供者): 辻井要介



甲殻類

### 選定理由

県内全域に分布するが、生息数はやや少なく、ダムや堰堤などの河川構造物の影響を受けやすい。

### 概要

淡水性の小型エビ類。別名ヤマトテナガエビ。体長約92mmに達する。近縁のテナガエビ属の中でもオスは平らで太いはさみ脚を持ち、左右の大きさが異なる。歩脚もやや太めで全体的にがっしりとした印象がある。体色は茶褐色で腹部中央背面には一本の黒い横帯がある。頭胸甲側面には縦縞や網目模様が見られる。海と川を往き来する両側回遊型の生活で、ゾエア幼生は海で育ち、稚エビは河川を遡上しながら成長する。遡上能力が高く、河川の上流域まで生息する。石川県 (日本海側)・千葉県 (太平洋側) から南西諸島・小笠原諸島、国外では韓国、台湾に分布する。

### 参考文献

石山尚樹 (2025) 2024年に石川県で採捕された淡水性コエビ類の記録。石川県立自然史資料館研究報告, (13): 93-101.  
豊田幸詞・関慎太郎 (2019) ヒラテテナガエビ。駒井智幸 (監修) 日本産淡水性・汽水性エビ・カニ図鑑: 80-81。緑書房, 東京。  
上田常一 (1970) 日本産淡水エビ類の研究(改訂増補版)。213pp。園山書店, 松江。

### 県内での生息地域・生息環境

県内全域の日本海に面する河川に分布し、河川上流から下流域まで確認されている。おもに河川上中流域で水のきれいな流れのある環境を好み、河床の転石や流木の下などに潜んで生活する。

### 存続を脅かす原因

農薬や化学物質などによる水質汚染、コンクリート護岸への改修、河床の浚深、ダムや堰堤の建設などによる生息条件の悪化。

(執筆: 辻井 要介)

## 準絶滅危惧 (NT)

エビ目 (十脚目) コブシガニ科

# マメコブシガニ

*Ptyhila pisum* (De Haan, 1841)

### カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

### 島根県固有評価

—

### 環境省カテゴリー

—

撮影者 (提供者): 島根県立宍道湖自然館



絶滅  
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

### 選定理由

生息条件が悪化し、生息数が減少傾向にある。

### 概要

沿岸性の小型カニ類。甲幅約20mmに達する。甲は半球形をしており、表面に顆粒が散在する。はさみ脚は比較的長大であるのに対して歩脚は短い。脚の構造上、横ではなく縦にジグザグに歩く特徴がある。体色は明るい褐色や濃褐色など個体により様々ある。おもに干潟や内湾の比較的きれいな砂底や砂泥底の潮間帯に生息している。繁殖期には、オスがメスを抱いている姿(交尾前ガード)を見かける。青森県陸奥湾、山形県宮城県仙台湾から九州 (鹿児島県)・奄美大島に分布し、国外では韓国、中国北部に分布する。

### 参考文献

大澤正幸 (2022) マメコブシガニ。「島根県の汽水域の短尾甲殻類 日本海西岸の汽水域のカニたち」: 17-18。島根大学研究・学術情報本部エスチュアリー研究センター。

### 県内での生息地域・生息環境

おもに県東部の宍道湖・大橋川・中海などの汽水域で生息が確認されている。内湾に広がる砂底や砂泥底の潮間帯に生息する。

### 存続を脅かす原因

生息地の人為的改変、良好な底質環境の減少などによる生息条件の悪化。

(執筆: 辻井 要介・桑原 友春)

## 準絶滅危惧 (NT)

エビ目 (十脚目) ベンケイガニ科

# ベンケイガニ

*Orisarma intermedium* (De Haan, 1835)

### カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

### 島根県固有評価

—

### 環境省カテゴリー

—

撮影者 (提供者) : 辻井要介



甲殻類

### 選定理由

生息条件が悪化し、個体数・個体群が減少している。

### 概要

沿岸性の陸ガニ類。甲幅約35mmに達する。甲は四角形で表面はなめらかで、前側縁には1つの歯がある。体色は鮮やかな赤橙色をしており、濃淡には個体差がある。河口域のヨシ原、土手、石垣、草原などに生息する。昼間は巣穴の中や転石、流木、ゴミなどの下に隠れ、夜に活発に活動する。水辺の暗く湿った環境を好む。冬場は土手などに掘った巣穴の中で冬眠する。抱卵したメスは、川や海に移動してゾエア幼生を放つ。秋田県 (日本海側)・千葉県 (太平洋側) から南西諸島まで分布し、国外ではインド・西太平洋沿岸に広く分布する。

#### 参考文献

桑原友春 (2014) 島根県沿岸に生息するカニ類。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (13) : 43-59.  
 桑原友春・山口勝秀・中野浩史 (2013) 隠岐諸島におけるカニ類の分布調査。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (8) : 97-107.  
 大澤正幸 (2022) ベンケイガニ。島根県の汽水域の短尾甲殻類。日本海西岸の汽水域のカニたち : 33-34。島根大学研究・学術情報本部エスチュアリー研究センター。  
 豊田幸詞・関慎太郎 (2019) ベンケイガニ。駒井智幸 (監修) 日本産淡水性・汽水性 エビ・カニ図鑑 : 262-263。緑書房, 東京。

### 県内での生息地域・生息環境

県内全域の日本海に面した河口域や淡水が流入する海岸で確認されている。土手に掘った巣穴や石垣、転石の隙間、ゴミの下などに生息する。

### 存続を脅かす原因

河川改修やコンクリート護岸化による生息環境の消失。堤防や道路建設による海への移動経路の消失など。

(執筆: 辻井 要介・桑原 友春)

## 準絶滅危惧 (NT)

エビ目 (十脚目) ムツハリアケガニ科

# アリアケモドキ

*Deiratonotus cristatus* (De Man, 1895)

### カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	準絶滅危惧 (NT)

### 島根県固有評価

—

### 環境省カテゴリー

—

撮影者 (提供者) : 辻井要介



絶滅  
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

### 選定理由

近年、県内での生息が確認されたが、生息環境が限られ生息数も少ない。

### 概要

汽水性の小型カニ類。甲幅約20mmに達する。甲は横長の六角形で平たく、横向きに一本の凸状に隆起した部分がある。はさみ脚は小さいが、オスはやや太くなる。体色は淡褐色や茶褐色で、雌雄とも腹部は赤色に色づく。内湾の干潟や河口域の感潮域上部に生息する。北海道から沖縄県にかけて広く分布し、本州四国太平洋岸、北海道・九州北西岸・瀬戸内海、奄美大島沿岸の3つの地域間で遺伝的分化が認められている。国外ではサハリン・韓国・中国・ベトナムに分布する。

#### 参考文献

桑原友春・辻井要介 (2020) 島根県におけるアリアケモドキの初記録。ホシザキグリーン財団研究報告, (23) : 79-82.  
 大澤正幸 (2022) アリアケモドキ。島根県の汽水域の短尾甲殻類。日本海西岸の汽水域のカニたち : 69-70。島根大学研究・学術情報本部エスチュアリー研究センター。  
 豊田幸詞・関慎太郎 (2019) アリアケモドキ。駒井智幸 (監修) 日本産淡水性・汽水性 エビ・カニ図鑑 : 322-323。緑書房, 東京。  
 和田恵次 (2012) アリアケモドキ。日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物-図鑑海岸ベントスのレッドデータブック : 207。東海大学出版会, 東京。

### 県内での生息地域・生息環境

県内では、県東部の神西湖や河川の河口域において生息が確認されている。周辺にヨシ原があり、水底に砂泥が広がる環境に生息する。

### 存続を脅かす原因

河口堰や防潮堰の建設に伴う塩分濃度の変化、コンクリート護岸化などによる生息条件の悪化。

(執筆: 辻井 要介・桑原 友春)

## 情報不足 (DD)

エビ目 (十脚目) ベンケイガニ科

# フタバカクガニ

*Parasarma bidens* (De Haan, 1835)

### カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	情報不足 (DD)	情報不足 (DD)

撮影者 (提供者) : 島根県立宍道湖自然館

### 島根県固有評価

—

### 環境省カテゴリー

—



甲殻類

### 選定理由

県内における分布は局所的で、生息に関する情報が少ない。

### 概要

南方系の陸ガニ類。甲幅約29mmに達する。甲は四角形で、フタバの名前の通り前側縁には眼窩外歯を含めて2歯ある。甲は褐色で、甲面には短い毛が散在する。はさみ脚は黄色みを帯び、爪の上側には顆粒が並ぶなどゴツゴツした印象がある。マングローブ林、河口域のヨシ原や草地などに生息する。島根県 (日本海側)・千葉県 (太平洋側) から南西諸島まで分布し、日本海側では山口県と島根県でのみ記録がある。国外では、インド・西太平洋に広く分布する。

### 参考文献

桑原友春 (2011) 島根県松江市の境水道で採集されたフタバカクガニ。ホシザキグリーン財団研究報告。(14): 262。  
大澤正幸 (2022) フタバカクガニ。島根県の汽水域の短尾甲殻類 日本海西岸の汽水域のカニたち: 35-36。島根大学研究・学術情報本部エスチュアリー研究センター。

### 県内での生息地域・生息環境

県内では県東部 (松江市) と隠岐島後において生息が確認されている。日本海に面する河川の河口域周辺や港内などで、淡水が流入する用水路やその周辺の石垣などに生息する。

### 存続を脅かす原因

生息条件の悪化など。

(執筆: 辻井 要介・桑原 友春)

## 情報不足 (DD)

ワラジムシ目 (等脚目) スナウミナナフシ科

# シンジコスナウミナナフシ

*Cyathura shinjikoensis* Nunomura, 2001

### カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	情報不足 (DD)

撮影者 (提供者) : 公益財団法人ホシザキグリーン財団

### 島根県固有評価

島根県固有種、基準産地

### 環境省カテゴリー

—



絶滅  
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

### 選定理由

県内では大橋川を含む宍道湖のみで確認されている。汽水域を主たる生息域とする種とみられるが、生活史や生息状況は不明な点も多い。

### 概要

宍道湖をタイプ産地として記載した汽水性の等脚類。体長約10—20mm。体は円筒形で、体長は体幅の11.5倍。第1胸脚のみが垂鉤状である。目を有し、第1小顎先端の歯の数が少なく、顎脚第2節の長い剛毛を欠くことなどで他種と区別できるとされる。本種は宍道湖固有種

### 参考文献

堀越彩香 (2012) 東京湾の干潟に生息するムロミスナウミナナフシ (*Cyathura muromiensis*) の分類および生態学的研究。28 pp. 東京大学学術機関ディポジトリ。  
松田烈至・瀬戸浩二・園田 武・山口啓子 (2023) 大雨及び出水が宍道湖の底生生物群集に及ぼす影響。Laguna, 30: 31-46。  
Nunomura, N. (2001) A new species of the genus *Cyathura* (Crustacea: Isopoda) from the Lake Shinji-ko, Shimane Prefecture, western Japan. Bull. Toyama Sci. Mus., (24): 19-23.

とされるが、ムロミスナウミナナフシと同一の種である可能性が指摘されている。宍道湖での個体数は少なくないが、本種を対象とした生態等の知見が少なく、分類学的な位置づけも含めた詳しい検討が望まれる。

### 県内での生息地域・生息環境

大橋川を含む宍道湖の砂質底。

### 存続を脅かす原因

宍道湖、とりわけ底質の環境変化。

(執筆: 林 成多)

## 情報不足 (DD)

ワラジムシ目 (等脚目) ナガラワラジムシ科

# ニシカワホラワラジムシ

*Hyloniscus nishikawai* Nunomura, 1990

### カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	情報不足 (DD)

撮影者 (提供者) : 島根県立宍道湖自然館

### 島根県固有評価

島根県固有種、基準産地

### 環境省カテゴリー

—



### 選定理由

大田市の石見銀山遺跡と大森町の間で記録されているため。

### 概要

体長3.3—4.8mm。頭が狭く、体の最大幅の半分程度。色素を完全に欠き、体は白色。眼を欠く。丸くすることができない。顎脚やオスの腹肢の形態などから他種と区別できる。タイプ産地のみから記録されている。

### 参考文献

Nunomura, N. (1990) Studies on the terrestrial isopod crustaceans in Japan V. Taxonomy of the families Arma-dillidiidae, Armadillidae and Tylidae, with taxonomic supplements to some other families. Bull. Toyama Sci. Mus., (13): 1-58.

### 県内での生息地域・生息環境

1984年9月5日に大田市の石見銀山遺跡と大森町の間位置する廃鉱で採集された個体が知られているのみである。

### 存続を脅かす原因

生息環境等が把握されていないため、不明。

(執筆: 林 成多)

## 情報不足 (DD)

ワラジムシ目 (等脚目) ウミベワラジムシ科

# ニホンハマワラジムシ

*Armadilloniscus japonicus* Nunomura, 1984

### カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	情報不足 (DD)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団

### 島根県固有評価

—

### 環境省カテゴリー

—



甲殻類

### 選定理由

自然度の高い海岸に生息し、開発等の影響を受けやすい種であるため。

### 概要

体長5.5mmまで。体色は赤紫色。幅広く平たい体形で、丸くなることができない。頭部前縁中央の突起が尖ることが本種の特徴の一つであるが、松江市や出雲市からの記録は、酷似した別種であることが判明している。自然海岸の砂利のたまったところや、転石海岸の適度な湿り気のある飛沫帯に生息する。日本全国に分布する。

### 参考文献

唐沢重考・川野敬介 (2014) 島根県の陸生等脚類。ホシザキグリーン財団研究報告, (17): 19-54.  
Nunomura, N. (1984) Studies on the terrestrial crustaceans in Japan II. Taxonomy of the family Scyphacidae. Bull. Toyama Sci. Mus., (6): 1-43.

### 県内での生息地域・生息環境

県内では隠岐(島後)で記録されている。

### 存続を脅かす原因

自然海岸の環境変化。

(執筆: 林 成多)

## 情報不足 (DD)

ワラジムシ目 (等脚目) ヒメワラジムシ科

# ニッポンヒロワラジムシ

*Littorophiloscia nipponensis* Nunomura, 1986

### カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	情報不足 (DD)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団

### 島根県固有評価

—

### 環境省カテゴリー

—



### 選定理由

自然度の高い海岸に生息し、開発等の影響を受けやすい種であるため。

### 概要

体長5mmまで。体色は赤褐色。丸くなることができない。体は楕円形で、長さは幅の約2.6倍。近縁種とは尾節板の形態や尾肢の相対的な長さにより区別される。岩礁または砂利の自然海岸で、適度な湿り気のある飛沫帯にのみ生息する。日本全国、および韓国に分布する。本種に似た別種 (*Littorophiloscia lineata*) も海岸に生息している。

### 参考文献

唐沢重考・川野敬介 (2014) 島根県の陸生等脚類。ホシザキグリーン財団研究報告, (17): 19-54.  
Nunomura, N. (1986) Studies on the terrestrial isopod crustaceans in Japan. III. Taxonomy of the Families Scyphacidae (continued), Marinoniscidae, Halophilosciidae, Philosciidae and Oniscidae. Bull. Toyama Sci. Mus., (9): 1-72.

### 県内での生息地域・生息環境

県内では松江市、出雲市(宍道湖を含む)、および隠岐(島後)で記録されている。

### 存続を脅かす原因

自然海岸の環境変化。

(執筆: 林 成多)

絶滅  
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

## 情報不足 (DD)

ワラジムシ目 (等脚目) トウヨウワラジムシ科

# ニシカワハヤシワラジムシ

*Agnara nishikawai* (Nunomura, 1987)

### カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	情報不足 (DD)

### 島根県固有評価

中国地方固有種、基準標本産地

### 環境省カテゴリー

—

No Image

### 選定理由

松江市枕木山が基準標本産地で、分布が山陰地方に限られるため。

### 概要

体長6.7mmまで。生時の体色は白または薄い褐色。丸くなることができない。胸部腹節とオスの第7胸肢腕節の形態などによって近縁種と区別できる。森林内の土壌リター中に生息する。山陰地方(鳥取県、島根県、山口県)に分布する。分類学的な位置づけについては、今後変更される可能性が示唆されている。

### 参考文献

唐沢重考・川野敬介 (2014) 島根県の陸生等脚類。ホシザキグリーン財団研究報告, (17): 19-54.  
Nunomura, N. (1986) Studies on the terrestrial isopod crustaceans in Japan. III. Taxonomy of the Families Scyphacidae (continued), Marinoniscidae, Halophilosciidae, Philosciidae and Oniscidae. Bull. Toyama Sci. Mus., (9): 1-72.  
布村 昇 (2022) ニシカワハヤシワラジムシ。レッドデータブックとっとり第3版 2022: 174.

### 県内での生息地域・生息環境

松江市、雲南市で記録されている。

### 存続を脅かす原因

生息地の森林、特に林床環境の変化(乾燥化など)。

(執筆: 林 成多)

## 情報不足 (DD)

ワラジムシ目 (等脚目) コシビロダンゴムシ科

# シロコシビロダンゴムシ

*Venezillo albus* (Nunomura, 1990)

### カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	情報不足 (DD)

### 島根県固有評価

島根県固有種、基準原本産地

### 環境省カテゴリ

—

No Image

甲殻類

### 選定理由

隠岐 (島後) 固有種と考えられるため。生息の記録を含め、原記載以降の情報が無い。

### 概要

体長約4—6mm。色素を欠き、体は白色。丸くなることができる。体色とオスの第1腹肢および第2腹肢の形態で他種と区別できる。隠岐 (島後) に分布する。

### 参考文献

唐沢重考・川野敬介 (2014) 島根県の陸生等脚類。ホシザキグリーン財団研究報告, (17): 19-54.

Nunomura, N. (1990) Studies on the terrestrial isopod crustaceans in Japan V. Taxonomy of the families Arma-dillidiidae, Armadillidae and Tylidae, with taxonomic supplements to some other families. Bull. Toyama Sci. Mus., (13): 1-58.

### 県内での生息地域・生息環境

1984年8月21日に、隠岐島後の鷲ヶ峰で採集された個体が知られているのみである。

### 存続を脅かす原因

生息地の森林、特に林床環境の変化 (乾燥化など)。

(執筆者: 林 成多)

絶滅  
野生絶滅

絶滅危惧  
I類

絶滅危惧  
II類

準絶滅危惧

情報不足



甲殼類

絕滅  
野生絕滅

絕滅  
危險 I 類

絕滅  
危險 II 類

準  
絕滅  
危險

情報  
不足